

正法の時機とおもえども

底下の凡愚となれる身は

清浄真実のころなし

発菩提心いかがせん

(『正像末和讃』14通目 真宗聖典五〇一頁)

底下の凡愚となれる身は

清浄真実のころなし

第16組 昭法寺住職

伊藤 孝順

text by Koujun Ito

私の住んでいる旭川の常盤公園内には北海道百年記念事業で設立された「風雪の群像」というブロンズ像がある。昭和47年に「東アジア反日武装戦線」によって爆破され、その後、復元されたものである。爆破理由は日本帝国主義の「アイヌモシリ侵略」の象徴と見なされてのことであるといわれている。主犯格の大道寺将司氏（現確定死刑囚）は釧路アイヌ居住区で生まれ育ち、アイヌの仲間たちがあらゆる差別を受けている現状を見て育ったということである。

その後、昭和52年「闇の土蜘蛛」（のちに加藤三郎氏による単独犯行とわかる）によって東本願寺の大師堂（現在の御影堂）が爆破される。決行声明には「東本願寺は日本国家と共にアイヌモシリを侵略し」とあった。北海道開教は「偉業」であったはずが「侵略」といわれ、さらに「奴等は日本の他民族侵略の腰巾着として立ちまわり、階級社会が生み出す人民の苦しみにつけこみ、寄生し、死者にくらいつき、ヌクヌクと肥え太っている善人づらした大悪党である」といわれ宗門は驚愕する。

対して翌月には真宗教学研究所声明が発せられ、声明文に侵略といわれたことに「宗祖親鸞聖人の精神の回復を求めて、宗門の退落の歴史、その紆余曲折を我々自身の罪責として、身に負わねばならない」と受け止め、また「親鸞聖人は、その仏道を名告る者の心を「底下の凡愚」といいあてられた。それは英雄主義の徹底した否定である。すなわち「底下」とは「われに人間の心あり」というような思いあがり拒否する言葉である。そのような自覚のみが、よくわれら末世の凡夫の心にひびくのである」と声明された。

この教研声明は「加藤氏の決行声明」に対し発せられているものであるため、

この文言をどういただくかは難しい問題であるが、この一連の出来事を通して宗門に身を置く私が問われているのは「底下の凡愚の自覚」であると思えてならない。

今まで、自分の住んでいる街で私が生活していることそのものを問うような爆破事件があったことも知らず、また大師堂爆破事件についても、知ったつもりで過去の歴史として記憶に止めている程度の自分が浮き彫りになった。そして知らされてもお宗門の歴史を傍観的に批判し、爆破事件の行為のみに是非を問い、土地を奪われ主張を奪われたアイヌの人たちの悲しみ苦しき怒り憤りの動機に思いを至らせることができない自分がある。そして日頃、自分の思い・価値感を絶対化し、自己の利害関心をもって物事を捉え、教えを自分の都合の良いように受け止めているのである。

「底下の凡愚」は「社会的差別構造の中で底辺を生活している者たち」という意味の言葉ではない。「汝、凡夫よ」と如来の呼びかけを聞いた「わたし」に起きてくる自覚である。親鸞聖人は「よしあしの文字をもしらぬひとはみな まことのこころなりけるを 善悪の字しりがおは おおそらごとのかたちなり」（『正像末和讃』聖典五一一頁）と述べられ、また「歎異抄後序」（聖典六四〇頁）において、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」と仰せられ、「そらごとたわごと、まことあることなきに」と教えて下さっている。私はこの言葉を何回も耳にしながらか、「わがごと」とせずに御言葉の前を素通りしてきた。

宮城顛先生の講述『大無量寿経講義二十六』で「真実に生きるということにおいて、自分を真実の側に立ててしまう。われに正義ありということになってしまう」とある。真実に生きるということは「真実ならざる自己」が明らかにされることと教えて下さっている。しかし無意識にも、「真実ならざる自己」から「真実なる自己」に成ろうとする私がある。

先程の「歎異抄後序」（聖典六四一頁）の続きに親鸞聖人は「ただ念仏のみまことにておわします」と仰せられる。我の中にまことを見出そうとする根深い正義を打ち破る言葉である。それでもまことが我にあると言うのであれば、そこには慢心しかない。『正信偈』では「邪見憍慢悪衆生」とあり、御文3帖目十二通では「すなわちわれひとりよくしりがおの風情は、第一に憍慢のころにあらずや」と蓮如上人は嘆かれている。

教えによって他者の存在にどこまでも無関心な自分、不真実なる自分に頷き、それを知らしめて下さったものに頭が下がる事こそが「底下の凡愚の自覚」であり、そこに立ち帰させられ仏道を歩ませて下さるものが「浄土真宗」なのだと思ふ。